

## 特別寄稿

## 災害文化、その先に見据えるもの～スタディツアーの旅から

災害文化研究会顧問・岩手大学名誉教授  
齋藤 徳美

2019年11月23日の「第5回災害文化研究会のスタディツアー」では、日帰りながら震災8年半を過ぎた三陸沿岸の復興状況や、二度と災禍を繰り返さないために記憶を引き継ぐべく津波遺構や伝承施設、さらには語り継ぐ人々に接することができた。内容盛りだくさんの視察であった。小生にとって、この8年余、何度となく繰り返したどった回廊ではあったが、研究会のメンバーに想いを語る旅は、改めて災害文化とは何かを自らに問う旅でもあった。

災害文化の災害というと、私たちは先ず風水害、地震、津波、火山噴火などの自然災害を思い浮かべる。しかし、有史以来、人間が自ら命を殺めてきた最大の災禍は戦争である。平成天皇が退位される時に、「戦争のない平成を心から安堵」と語られた。そうなのだ、思い起こせば、明治、大正、昭和と近代の日本は戦争の歴史であった。平成だけが戦禍を引き起こさなかった時代なのである。

太平洋戦争で、鉄の街釜石市が艦砲射撃で大きな犠牲を出した記録を伝える釜石市郷土資料館は、戦争の悲惨さを改めて思い起こさせた。筆者は終戦の4か月余前の1945年3月31日に秋田市に生まれた。秋田油田と製油所のある秋田市は、終戦のその日、8月15日未明に空襲を受けた。後期高齢に足を踏み込み、一人眠れぬまま、これまで生きてきた懺悔の一つ一つを思い浮かべて天井を見上げていると、母の背中で夜空を焦がす真っ赤な炎に怯えながら、防空壕に逃げた記憶が今でも鮮やかによみがえる。(という話をしたら、専門の先生から、3歳以下の記憶は、まして4か月の赤ん坊の記憶など残らないものですよと言われた。多分刷り込みであろう。)

馬齢を重ね、あと幾年生きられるか人生の幕引きのステージで、実体験は全くないものの、日本人だけで310万人という気の遠くうような同胞が、意に反して命を落とした戦争の悲惨さだけは

次代に語り継がなければならないとの思いがつのる。「絶対に戦争だけはしてはいけない。」鑑みれば、この75年間戦争をしなかった、武器を持って人を殺さなかった国は先進国で日本だけである。戦後に限っても世界で110回以上の戦争が勃発し、アメリカも中国もイギリスもドイツもフランスも戦争に加担しているのである。このことは声を大にして世界に誇るべきではないか。唯一原爆の被災を基に、国際紛争の解決手段としての戦争を放棄する平和憲法を理想として掲げる日本こそが、核の恐ろしさを訴え、果てしなき軍拡をやめるように、世界のリーダーシップを発揮すべきなのである。

戦争という災害を引き起こさないための歯止めになるのは、社会的な仕組みであろうか、人間一人一人に育まれる心であろうか。人間の本能は「愛と闘争心」である以上、人類が絶滅するまで戦争という災害は避けえないものか。そして、災害文化はどのようにかわることができるのであろうか。工学畑を飯のタネにしてきた小生には糸をほぐせないまま、短い見学の旅を終えた。

ちなみに、平成天皇、皇后両陛下は、戦没者の慰霊に海外まで足を運ばれた。サイパンでもこうべを垂れるお姿に、小生も含め多くの国民は感動した。しかし、私たちは、両陛下の贖罪と慰霊の旅に委ねて、なすべきことをかまけていないのか。本来、それは象徴天皇ではなく、国が政権がなすべき政治行動ではないのか。そうしなかった政権を選定してきたとするなら、私たち国民に最大の責任があるのではないのか。戦争という災害を引き起こさないための災害文化は、それは政治という魔物に翻弄され、根付かそうという意志はこの国には益々薄れていはいしないのだろうか。ならば、筆者は死んでも死にきれないという想いに突き動かされるのである。

一方で、平成の時代は、自然災害に翻弄される

時代でもあった。地震災害についていえば、1995年阪神淡路大震災や2011年東日本大震災を筆頭に、2004年新潟県中越地震、2005年福岡県西方沖地震、2007年新潟県中越沖地震、2007年能登半島地震、2008年岩手・宮城内陸地震、2016年熊本地震そして2018年北海道胆振中部地震など、「加齢性記憶みだら喪失シンドローム」を発症しつつある筆者には思い出しがたい数の大地震が頻発した。

火山噴火については、火砕流で43名の犠牲者を出した1991年雲仙普賢岳、噴火前の住民避難で犠牲者を出さなかった2000年有珠山、全島民が島外に避難した2000年三宅島噴火、そして登山者63名が犠牲になった2014年御嶽山噴火。1998年には岩手県のシンボルでもある岩手山が噴火するかもしれないと、防災対応に奔走させられた岩手山噴火危機にも遭遇した。筆者の短い研究者生活の後半の主題は、岩手山の噴火からどう県民の命を守るかであった。そこに、非力ながら関わったことは地元研究者として幸いと思うのではあるが…。

風水害災害の頻発は温暖化の影響であることは、言を待たない。2014年広島土石流、2015年鬼怒川決壊、そして2016年台風10号では観測史上初めて東北地方に台風が上陸して小本川が決壊、岩泉町では老人福祉施設が濁流に呑み込まれるなど大きな被害を出した。さらに2018年には西日本豪雨、その傷が癒えぬ間に2019年には台風19号が関東から東北の広い範囲に大きな被害をもたらした。岩手県でも、普代村で時間雨量100mm、降り始めからの累積で467mmというかつてない降水量を記録した。気象庁の大雨警報の発令、市町村による避難勧告や指示が、適切に避難に結びついていないなど多くの課題が指摘されている。

大都市で、何十万人が避難する避難場所の確保などできはしない。それに対して内閣府は垂直避難、つまり2階に上がるのも避難のうちだと詭弁を弄している。避難とはあくまでも被災しない安全な場所への避難を行うのが本来の姿であり、垂直避難は避難が間に合わないときの緊急手段である。わが県都盛岡市でも想定通りに北上川・雫石川・中津川の3河川の合流点から氾濫したら、市

街地はほとんど水没する。何万人の市民が避難する避難場所などない。

現在のように河川に堤防もなかった時代には人々はしばしば襲う豪雨にどう対応していたのであろうか。日本の各地に「水塚」という水害時に身を寄せる高台が作られていた。堤防も整備されていない時代には、洪水は季節の風物詩とっては言い過ぎだが、河川の氾濫は雨季には日常的であったのである。だから集落にとって氾濫はごく当たり前の出来事としてとらえ、盛土して水が及ばない小山を作り、小屋の中にはしばしの避難生活で生き延びる物資を備蓄していたのであろう。それは、今、津波での避難が困難な海岸近くに避難タワーを建設したり、山間部の集落では遠くに離れた公共避難場所ではなく、集落の最も安全なお宅に避難するといった実務的な安全確保のあり方にも、共通する考えであろう。

命を守るハードの拠点づくりを、災害文化との範疇に入れていいものか。そうなら、災害文化が包括するエリアは、人文社会学の範疇から土木・建設といった工学の分野にまで関わることになる。東日本大震災の復興に30兆円を超える国費、と言っても国民の税金を投入した復興の在り方は妥当であったのか、その総括も災害文化の視点から行われるべきとも思うのである。

東日本大震災のマグニチュード9.0は観測史上初めてであり、熊本地震では活断層が連動して地震が発生し、震度7が2度も観測された。豪雨災害では時間雨量100mmを超える雨量も観測された。平成の自然災害においては、「想定外」であるが故に被災はやむを得ないともとれる「想定外」が免罪符のように繰り返された。私達が気象や地震の観測を始めてわずか140年程度に過ぎない。何千、何万年という自然のスケールからしたら、あっという間でしかない。私達が経験した事象以外を想定外というならば、想定外はこれからも繰り返し頻発するのである。

鑑みれば、地球が誕生して46億年、その地球上に人類の祖先が出現して約200万年、暦はせいぜい2000年、機械文明の出发点ともいえるジェームスワットが蒸気機関を発明して250年、テレビは

60年、今はやりの携帯電話やスマホなどは20年に満たない。地球上で君臨する人類の栄光など一瞬の出来事に過ぎない。私達は今まで自然の中で生かされてきたし、今も生かされている。そしてこれからも生かされていく。自然に対する畏怖（恐れおののく）と畏敬（うやまう）の念を抱かなければならない。それが、自然災害に向き合う災害文化の原点なのである。その原点に立ち返ってこそ、被災を繰り返さないために何をなすべき、災害文化のその先を見据えることができるのだと思う。

釜石市では、市民の避難ルートをたどり、仙寿院、福男の競争ではあるが津波避難を大切にしている災害文化の実践でもある場所にも立ち寄った。常楽寺の慰霊堂では被災直後の説明も受けた。津波避難場所ではないにもかかわらず避難した多くの住民が犠牲になった「鶴住居地区防災センター」の跡地に整備された「鶴住居トモス」では、犠牲者を追悼する「釜石市祈りのパーク」や被災を繰り返さないための教訓を伝える「命をつなぐ未来館」を見学した。

吉里吉里の吉祥寺では、碓川前町長から被災状況や復興の課題について説明を受け、「大槌の未来と命を考える会」代表の高橋英悟住職からは、人が「生きた証」を伝えることの意義を聞かせていただいた。小生が人が人なりに生きたことへの畏

敬の念を蘇らせたのは、2度目に入れていただいた位牌堂である。ドーム状の巨大な位牌堂には吉里吉里地区の全世帯の黄金色の位牌が何百と整然とおかれている。全地区民の生きた証が時を超えて引き継がれているのである。筆者には、ここは極楽浄土、ここに眠るとするならば死も怖くはない、この場でなら安寧に死を迎えられるとすら思えるのである。その想いについては短いスペースでは語りつくせないが、拙文を読んでいただいた方にはぜひお訪ねいただきたい。人の生きざまが、死生観が変わる・・・少なくとも小生はそうであった。

絶対戦争を起こさないための社会的、倫理的な模索から、自然災害から命を守る地域づくりへの「生き方改革」まで、どう道筋を考えればよいのか。災禍を繰り返さないための原点となる災害文化のその先に見据えるべきか、戸惑いを覚えるのも、すみません、老齡のサイトーの率直な思いである。もしかしたら、サイトーは何かとんでもない思い違いをしているのかもしれませんが。「災害文化研究会」の役割は「災害文化」が、二度と災禍を繰り返さないためにどう育まれていくべきかという命題の模索にあることも踏まえ、皆様のご助言をいただければ幸いに思う次第である。